

九月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

午どし

古屋 祥子 群馬

刻をただ遣るために塗るぬりゑなり心のままに色重ねつつ
かまきりをかたまりと読みぬ、なあるほど確と前脚折りて固まる
「血行に痒みに保湿によく効くと、頼りにします」『ヘパリン』クリーム
もの忘れ多けれどなほ記憶せり校長の恭々しき訓辞内容
午どしを七たび余過ぐ、野次馬で跳ねつ返りの性は変はらず

これがわたし

小島 ゆかり 東京

いろいろなことありて去るこの町に家族の顔のあぢさゐの花
母の死もわが死もたぶんその町で 八度目の転居準備を急ぐ

あれもこれも捨てる捨てようつづまりは本と二匹の猫が大切
ああこれがわたしなんだなよりによつて雨の季節に引越しをする
この町の二十年のどの日でもない今日の日の雨後のゆふやけ
ステイ・ホーム 風間 博 夫 千葉

「せよ」でなく「してね」であれど Stay home「せよ」と言はれてゐる感じせり
Stay home 守りぬきますスーパーにウーロン茶買ひにひとり出かけて
訓告になれど退職金は得つ賭けマージャンの黒川弘務くろがわひろむ
千点に黒川検事長百円を賭けつかまらず ボクは十円
向かひあふホームよきかなちらと見る白きマスクの縁おもへば

マスク長者

鈴木 竹志 愛知

千人に一人はゐるかスーパーにアベノマスクをしてゐる人は
どの人も知り人に見ゆスーパーに出会ふマスクのあの人この人
たくはへしマスクがすでに五百枚超えてわが家はマスク長者に
二波三波無きを願へど店の棚マスクのあればついつい買ひぬ
マスクせぬ若者等ゐて蛮勇といふ語を想ふサカエ地下街

☆

☆



高野 公彦 千葉

「毒」の字を掲げてタンクローリーは走るに、嘘を隠す宰相
にんげんの知恵より出でし悪と欲を憎みて眠り、覚めて忘れをり
梅雨明けて大葉の葉おほはの葉脈の走り香かぐはし刺身と食めば
ひまありて何も起こらぬ退屈たいくつさこれが至福とあとで気づかむ
空海をお大師さまと呼び馴れし四国庶民の一人、わが母

水島 晴子 兵庫

仲 宗角 三重

道ばたの墓子の空き箱かたはらの雛芥子のはな共に緋の色
赤錆びたフェンスめぐらす草藪に四ひら窺るる額のあぢさお
黒マスクごしに語れど補聴器屋さん端ばしまでも言葉鮮明

コロナなど知らずにすんだあの人もこの人もと面を手繰りよせをり
ありなしにただよへる香よ胸底にしづむおもひを呼び起こしたり

杜 沢 光一郎 埼玉

奥 村 晃 作* 東京

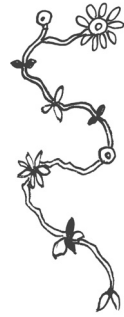
晩春の西日さし込む大竹藪ふとき数本の根もと浮き立つ
白き輪を節々にもつは今年竹わか葉しげりきてさらにくきやか
「竹秋ちくしゅう」は陰暦三月の異称にて老人われの感傷さそふ
二人子と畳に腹はひ「かくや姫ひめ読みし日もありにき夢のごとしも
山鳩がよききて鳴きし竹群も今では建売住宅ひしめく

武 田 弘 之 神奈川

森 重 香代子 山口

コロナ禍の街を行くとき楽しくてまたしても会ふマスク美人に
「禍ナロコ」と書くことにせん街なかの食堂「翌」の看板真似て
インストールしたるスマホに感染者わかとぞいふこんな世に生く
書くはうが速し楽しと思ふわれになぜパソコンを習へといふか
とりあへず現政権の倒れたるのちに來る世を楽しみ生きん

日本棋院入口近く等身大の仲邑菫棋士の写真立つ
仲邑菫初段のプロマイド二通りどちらも完売とその見本置く
十代の活躍びんぎょう嬉し伊藤美誠、藤井聡太また仲邑菫
結局は万能力ばんりきりを發揮する魔法の機器でプリキユアが勝つ
黒はミツビシ、赤はゼブラのボールペン、万年筆はセーラーのわれ
産毛とふやさしきものにおははれて耳あり二つ手鏡のなか
蝶はもとその身柔らの虫なればかがやく翅をわが掴み得ず
終日雨降りつづきこれから夏なのか冬なのか分からなくなる
又近づて話しような、といふ会話行き摺りに聴き涙すわれは
マスクもて被ふといへど誰彼の見当はつく貌といふもの



日影 康子 富山

短歌^{うた}まなび互みに育てし友情の温きを解きて別れむとする

春風の街辻に手を握り合ひ別れを惜しむ教室の友と

夫とふたりの卵三このたまご焼けさは格別ふんはり焼けぬ

拉致被害者横田めぐみさんの父君の死の報かなし今朝の新聞

クリーム色の穂花咲き満つ南天に足長蜂の日がな翔び交ふ

影山 一男 千葉

緊急事態宣言解除後十日経てアベノマスクはまだ届かない

名にし負ふアベノマスクの届きさて専門家会議はどこへ行つたか

失職せし若き日おもふ走り去るUber Eatsの自転車みれば

高三の夏に読みたる「ガン病棟」五十年経て記憶を探る

衰へし心やいかに校正し老眼鏡のくもりを拭ふ

桑原 正紀 東京

生涯にただ一冊の歌集成し山本清さん逝けりコロナ禍さなか
読み返す『落葉樹林』に直ぐ立てる九九五首のしづけさ

三〇〇余首を削ぐはその生削ぐに似て苦しかりけり選を託され
追空、稜二、順三郎を慕ふ歌ぬかづくごときは人柄にして

ふるさとを妻子を詠ふまなごしの慈愛にみちて一生^{ひとよ}かはらず

狩野 一男 東京

雨の朝ポストの前にうつむいて佇む老いは我にあらざるや
雨傘をくぐりて妻の胸もとに雀とまりぬ愛のごとしも

まだ我に気づかず傘をたたみみる道のむかうの妻に手を振る

あたらしい感覚見よと言ふごとく雨中にならぶあぢさゐの花

紫陽花があぢさゐいろに咲いてゐる我はこのごろ憂鬱である

宮里 信輝 神奈川

名にし負ふアベノマスクが届きたり二〇二〇年六月十二日

安倍首相独断により届きたるまさに中国製なるマスク

「緊急事態宣言」解除は五月二十五日せめてそれより前に届けば

遅れ遅れ逆にマイナスポイントにアベノマスクも「特定給付金」も

アベノミクス打つ手なくなりアベアキエ、アベノマスクがアベノリスクに

岡崎 康行 新潟

花菖蒲六十万株咲く苑を苛める風花はよろこぶ

綿毛いま柔らかき円となりて飛ぶなにか莊嚴たんぼの花

庭に来てわれに晒せり正装に変身をして雄の雉子がゆく

庭にゐて雄の雉子するどく鳴く真昼テレビがひとり笑ひつづける

電柱のあたまに止まりはしぶとは庭に睥睨の目を投げてくる

木畑 紀子 京都

まみどりの葉あひに微小白花が星のごと咲くふうせんかづら

そしてそれから花は変じて稜^{かど}三つあるさみどりのふくろになりぬ

ふるる指にふくろの産毛やはらかし日に異にまるくふとるふうせん

会へざればおもふ心のふくらみてふうせんを吊るふうせんかづら

秘めてゐる花のこころが実るまでふうせんふうせん割れてはならず

島田 暉 神奈川

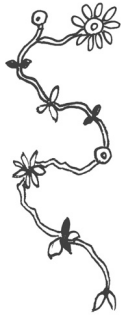
朝早くひよどりは何を叫ぶらむ鳥語きびしく庭を切り裂く
ふくみ笑ひしながら空の晴れてゆく雨の言の葉庭に残して
咲き盛るみもぎの花に朝日さし池の水面は金のささやき
水族館出でて仰げる初夏の空ばんどういるかの白き雲ゆく
天も地も廻れよ廻れ空高くうた唄ひたし雲雀になりて

大松 達 知* 東京

それらしい夜になりたり遮断機の音を連べるいっぽんの風
ぶるるんるんぶん自転の向きに逆らつてぶるるん飛んでぶるるん落ちた
役職の付いておおきな窓になることなくずつとどの窓も窓
この窓を見ながらわれは死ぬるかやそのとき窓の声はするかや
しんけんな貌して宛名読んでいる郵便配達夫の一、二秒

田宮 朋子 新潟

「血をもらひドラキュラみたい元気だ」と笑ひたまひし山本清氏
巻機山とほく臨みて帰らざる友を語りし山本清氏
雪国の山毛櫨の芽吹きを愛でましし山本清氏みまかりたまふ
留守電のこゑ幾たびも呼び出して聞きをり今は亡き人のこゑ
壮年の山本清氏が写る夫の高校卒業アルバム



津金 規雄 神奈川

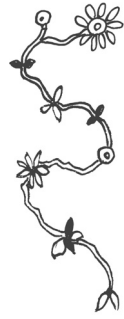
業平も光琳も識らぬイノセント 金屏風見るひとみに幸あれ
屏風絵を見しのち池に咲き盛るかきつばた賞つ夕光のなか
いとほしむこのひと時の色よ香よ若き最中の君らは知らず
女子会に一人まじりて飲むことも慣らひとなれり ああ、夜の雲
「先生はシティーボーイ」と揶揄されてやいのやいので終はる飲み会
新型のコロナウイルス跋扈して公演つぎつぎ中止となしぬ
公演の中止決まりしポスターのあれもこれもがまだ貼られをり
その齢に舞はねばならぬ舞のありひと日ひと日をウイルスが喰ふ
戦中の舞へぬ辛さを語りたる四世八千代の芸話を思ふ
必ずや名人出づべしコロナ禍に妨げられし舞台人より

清水 正子 神奈川

シニアサロン・ジュランタの窓へ薔薇が咲き一通行人われを寄らしむ
まばたきのやうに花びら頭はせて薔薇は見てゐるマスクのわれを
花粉症ならざるわれの白マスクあはれ薔薇の香をシャットアウトす
薔薇の咲く青水無月を感染者0が続かない横浜のコロナ禍
鬱の日はアバの《タンシング・クイーン》聴く午後の紅茶に薔薇ジャム入れて

小嶋 一郎 佐賀

打ち込みし生木の杭が芽を吹きて予期せぬものにごころ遊ばす
「桜剪るバカ」とは知れど隣り家へ向かふ一枝始末をしたり
マスクして口笛吹けば何のその鳴る鳴る少し掠れながらも
マスク填め眼鏡の曇る不都合を都度都度告ぐるこの三か月
眼帯と眼鏡とマスク掛けられて両の耳朶けふは音をあく



後藤 美子 北海道

われら二人のみが客なりゆふぐれのレストランに結婚記念日祝ふ
ネコヤナギ竹筒に挿す窓のむかう恵庭岳あり夕光のなか
先行きはかり難けれ六十年共に生き来し夫と向きあふ
大吟醸ふふみてほのか温みくるころたのしも今はもの思はず
南極に極夜はじまる五月十日札幌ははじめての夏日を迎ふ

福士りか 青森

花すぎて青実ふくらむ胡桃の木しづかに尋ねしづかに答ふ
「りちゃん」はいつしか「福十先生」となりこの頃は「マダム」と呼ばる
マスクなどしてはをられぬ廊下より「木曾の最期」を範読したり
生徒らが笑顔で走るそれだけで泣きさうになる 二〇二〇夏
「豊丞」の蛇の目の杯に冷や酒を注ぎて立夏の風のさはやか

藤野 早苗 福岡

手を合はせうつつむきしばし瞑りたり此岸にをらぬ父の「父の日」
うぶすなに摘果しをれば刺さりたり無沙汰を責める柚子坊の棘
一家言としてウスターもうべなへビアジフライにはタルタルソース
受付の一輪挿しのいちりんの名を問へるひと アスチルベだよ
〈食欲〉の欲うしなへる食さびし粥ひとわんを胃の腑に流す

田中 愛子 埼玉

久々の打合せにて服よりもレースのマスク褒められてをり
なんとなく腰痛ささうな梅雨の日をハーフサイズの大根えらぶ
コロナ禍は未だ収まらずあぢさるにスカート濡らし路地ろぢを行けり
「ヒロシです」名告る男の実の名がヒロシにあらず つゆのまの晴れ
あすもまた約束はなし加持祈禱のごとく聞こゆる夜の雨おと

橘 芳園 新潟

鳩居堂まへの匂ひにあこがれしころ老いずに七十四となる
窓外へをりに目をやり『文学の責任』講じし高橋和巳
地理学徒われの興味を文学に引き戻したり和巳の講義
寺の子であるを隠してしまらくを友とかよひし賀茂川教会
下宿へと帰る思ひす七十四サンダーボードの座席にすわる

水上 比呂美 東京

口を覆まなこひ眼を覆まなこひ髪覆まなこひ手先を覆まなこひヒトは生きゆく
会話せず抱擁をせず握手せずシエルターに入りヒトは滅びむ
マスクなしのはだかの顔は公害罪 金属マスクの警官が来む
美しい人も美しくない人もひとつの口にひとつのマスク
母も子もぬらりひよん像も手作りのマスクしてをり鬼太郎ひろばに

原 賀環子 東京

演技とも地とも見ゆる画しのばれて紙面にミシェル・ピコリの死あり
初老賞いただいちやつた ささなみの夜の電車で席をゆづらる
ゆづるには席とはすぎる青年よ死んだママンに似てゐるわれか
懐しさ・愛惜・孤愁 サウダーデを胸に生きゆくポルトガル人
鍋こがすは裡なるわたしキッチンをそのままにして月を見に出る

水上 美季 東京

石楠花に惹かれて入る道の奥あ、バスケ部にゐた田中くん家^ち朝のわが視界に四十雀が来て何かついばみ去つてはまた来ぬ抱へてる鞆に車内放送はかすか共鳴してをり 眠し

弁当と味噌汁のごとノーパーソとマウスを持つて会議に行く人紫陽花がもう咲いてゐる曲がり角五月は散歩ばかりしてゐた

大野 英子 福岡

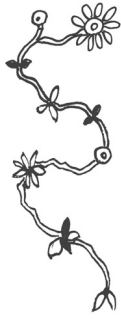
もう嫌だコロナ、黒川、甲子園K音ばかりが響かふテレビ

ああ、まさかジブリ音楽ばかり聞き癒されてゐるわたくしとなる潤沢にマスク売らるる頃届く鳴り物入りのアベノマスクが日本中のハコモノみんな死んでゐる昼間小暗き国際会議場ストックの肉と魚を使ひ切り自粛生活終はらせんとす

松尾 祥子 東京

絞首刑逃れし岸の卑怯さを受けつぐ安倍の嘯きやまず

三人がリモートワークする声を聞きつつ昼の Pasta を茹でるマスクする息苦しさはねつとりと梅雨に入りゆく空気の重さ逝きし子も嫁も忘れて姑は米寿祝の鰻たひらく
ひつたりと触れあふ育児、介護ありて救はれるるはわれかも知れず



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八—一〇六

木畑紀子歌集 令和元年7月刊 二七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ コスモス叢書第1157篇 現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一—二二—二〇

福岡市文学賞受賞

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三—六—三〇二

島田暉歌集 令和元年9月刊 二二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一—一四—六